
笑いたい。

愛花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑いたい。

【Nコード】

N5005Z

【作者名】

愛花

【あらすじ】

この主人公、近藤未来はおかしな女の子。

産まれたときからおかしな考えを持った子だった。

そんな子が中学生生活をどのように送っていくのか・・・

〜プロローグ〜（前書き）

今回は未来の過去について語ります
温かく見守って下さいW

くプロローグ

私は、何の為に生きてるんだろう。
何の為に、この世に産まれてきたんだろう。

私は、中学2年生、2年4組こんとどうみらい近藤未来。

私には生きていく意味が無い。
生きる理由が無い。

好きな人も居ない。私の事を好きで居てくれる人も居ない。
気持ちが落ち着く場所も無い。

この世に存在したいと思える時、場所、人が無いし居ない。

世間では中学生は青春するだのなんだ言ってるけどそんな物私には
程遠いと思う。

自分はこのままで良いなんても思っていない。

何度も自分を変えようと試みた。

しかし、やっぱり・・・ダメだった。

偉人の名言など呼んで自分を励まそうと思った。

でも、私は他の皆と違うのだ。「いい言葉言うな」など思った事もない。

「何だ、このきれいごとばかり並べている言葉は。」「何の名言を見てもそう思った。

素直に受け止められない。

「偉人だからこんなこといえるんだ。失敗した人はこんな事言えない。」

その言葉が頭の中をグルグル回った。もっと素直に受け止められる自分でありたかった。

もっと小さい、子供の時から私は他の子と考え方が根本的に違かつ

た。

幼稚園の時から私はこんな変な子だった。

いつからこんな子になっちゃったんだろう・・・？それは遠い昔の事だった。

赤ちゃんのころから私は変な子だったんだと思う。

何をするにもずる賢く考えてきたような気がする。

小学4年生の時、私はやはりもう完璧に変な子だった。明るいクラスだったが、私は浮いていた。

はつきり言ってそんな人の見た目なんかどうでも良かった。もう何をしても無駄なもの。

そんなことを思っただけ何もせず生きていた毎日だった。今もそうだけだ。

しかし、やっぱり明るいクラスになじむように私も明るい性格になりたいと思った。

異性にモテたい、注目されたい、勉強を頑張りたい、スポーツを頑張りたい・・・

笑いたいときに、一緒になって笑いたい。

私なんか、小さな夢ができた。それだけで嬉しかった。

しかし、それはただの私の夢で、現実にはほど遠いかった。まず私は勉強をしようと思った。

何も勉強なんてしてこなかった。頑張ろう、ただ努力しよう。

私は見事に勉強が得意になった。私もこのクラスの一員として存在する意味がある日が来るんだろうか！

しかし・・・そんな私の考えはすぐに変わった。

野村怜奈のむらね。うちのクラスの中心的グループの中心（ボス？）で、明るい。

すぐく明るい、勉強もできる、スポーツもできる。彼女いわく「生

まれつき「らしい。

何もしなくても、何でもできるんだそうだ。

私が100点をどんなにとっても、1位になっても、どれほど努力しても・・・

クラスの子が話しかけてくれる事はなかった。

いつも、話しかけられるのは怜奈だった。「怜奈、90?すごい」
私なんか、100なのに・・・私のほうが、上なのに・・・誰か、
気づいてよ・・・誰か・・・誰か・・・

どんなに頑張っても無理な人、何もしなくてもできる人の差を感じたときだった。

やはり、私はダメなのだ。怜奈は何でもできるけど、私は無理なのだ。

何をしてもこんな奴、ダメなんだ、もう・・・やめよう。

怜奈が、こつちを見てくる。ひどく、ひどく楽しそうな顔で。怜奈が、言った。

「アンタと私は違うのよW」

やはり、私は「どんなに頑張っても無理な人」なのだ。

怜奈が憎いなんて思わない。怜奈が羨ましいとも思わない。

ただ・・・ただ・・・自分にむかついた。

こんな自分に産んだ母を恨んだ。こんな育て方をした家族を恨んだ。

どんなに頑張っても無理な人と何もしなくてもできる人を知ったこの瞬間、当時小学4年生だった幼い私の小さな1つの夢が、消えた。

「プロローグ」(後書き)

いきなりパソコンで書き始めましたW

何も考えずに。W

結構うまくできたと思います。

しかしこれは趣味で書いているのでプロになりたいわけじゃないです。

趣味の1つなので温かく見守っていただけると嬉しいです。

コメントお待ちしております！

く厳しい現実く（前書き）

今回は未来の周りの方について書くことかど。W
即興最高ー（笑）

く 厳しい現実く

生きる希望を持っていた時もあった。

その小学4年生までは・・・。

その時、幼かった私は確信した。「もう無理」なのだ。

生きている価値、存在してる意味が無いのに私が生き続けて来た理由はきつと

「生きる希望を持っていた」からだと思う。

生きていれば必ずいいことがある。人生、まだ終わってない。そう考えてきたからだと思う。

もつとも、今はそんな感情少しの少しも無いが。

私は本当に「不幸な人間」だった。

家族。母、父、姉、私、妹の5人家族。やはりベタな展開だ。

姉、妹はできがよく、私1人、こんな変な子なのだ。

この14年間、姉と妹にどれほど侮辱された事か・・・。

母、父は私の存在を無視する。何もしてくれない。親の意味が無い。姉と妹は必要以上に可愛がられ、育ってきた。私が可愛がられていたのは遥か昔だ。

好きな人。告白された事が1度もない私でも、好きな人はできた。たにくちりようた

谷口涼太。こんな私にも優しくしてくれた。

でも・・・友達と話すのを聞いてしまったのだ。

「近藤？誰だそれ。あーアイツか。アイツさー絶対俺に惚れるよWWWあの顔、見てみWこっちは告られる回数upの為に優しくしてんのかなーWWW」

最悪・・・だった。私は彼を愛していた。愛しさが憎悪へと変わった。わずかな瞬間で。

友達。私は、友達にいじめをされていた。幼稚園のころから、ずっと。

全員で無視されたり、喋りかけたら逃げられたり、遊んでる途中で何も言わずに帰ったり。

本当につらかった。でも耐えるしかなかった。いつか本当の友達ができる事を信じて。

私は、家族、好きな人、友達に失望した。

私をわかっている人が現れる日は・・・来ないのだろうか。

〜厳しい現実〜（後書き）

短いな（汗）

次は長くします〜！

即興の力は強いなと改めて思いました（笑）

次回も読んでいただけると嬉しく思います！

く私よりつらい人く（前書き）

新しい人を登場させます！

これからの展開に期待してください！

このシリーズは即興ですw

「私よりつらい人」

「はあ・・・今日も、私をわかってくれる人はあらわれなかった。」

「いつになったら、私をわかってくれる人があらわれるのかなあ。」
「おもわず、本音がこぼれてしまった。」

「あ・・・」泣いていた。綺麗な涙だった。
こんなところ、見られたくない・・・体育倉庫に逃げた。

誰かが・・・居る。あ・・・どうしよう、クラスメイトとかだったら。

「だ・・・大丈夫??近藤未来ちゃんだよね!??」

「え・・・?」

「あれ、違った?」

暗くて顔がよく見えない。

「私、花居夏帆だよ。同じクラスの^^」
はないかほ

「あ・・・夏帆ちゃん。知ってる・・・私と同じで、授業に参加してない・・・」

「そう。同じだから未来ちゃんと話してみたかったんだ。よろしくねb」

久々に・・・名前を呼ばれた。自分が名前を呼んだのも、それ以前に人と喋ったのも久しぶりだ。嬉しくて、嬉しくて、泣いてしまった。

「ちよつ、大丈夫??」夏帆が心配した顔で言う。

「うん・・・夏帆ちゃんは、何で授業に出ないの?」

「それはね・・・」

夏帆の現状は私が思った以上に壮絶な物だった。

「私の家族は、私、母、父の3人。母は家出して家に居なく、父は酒を飲み過ぎて暴力をふるってくる。私は父を警察に言つて、私は施設に入れられる事になったけど、施設は嫌だったから高校生と偽つて今1人暮らし中。いとも、おばあちゃんもおじいちゃんも私の居場所を探す人は誰1人居ない。そして私が好きだった人、細川健治わけんじは、両想いで付きあつてた。だけど私の家に来た時私の家に放火して私の家は全焼。もちろん別れた。1人暮らしなのに家が全焼した私はしばらく公園で暮らしながら年齢を偽ってバイト。少ししてからアパートに入る。食べ物の変な噂をするご近所さんを回つてもらつたり・・・友達はこの家の事情がたくさんあつて誰1人居ない。つまり私には信じられる人が居ない。だから学校の授業には参加しない。もつとめんどくさくなるし。」

・・・言う言葉が無かった。

正直、私よりつらい人なんかいないと思つてた。世界1不幸な人間だと思つた。

私より、つらい人間があらわれた。

私よりつらくて壮絶な人生を歩んできたはずなのに・・・

私より強くたくましく、生きている。尊敬した。

「すごい・・・」

涙を流しながら言つた。これしか言う言葉が見つからなかった。

「何で・・・私よりつらいはずなのに・・・強く生きているの？何でそんなにつらいことばかりなのに・・・生きているの？」

夏帆が言つた。

「私よりつらい人は世界でもつともつと居る。私はそんな、私よりつらい人を楽にしてあげる為に自分に降りかかる事にはくじけず、前を向いて生きてる。いつか、つらい人が居なくなる社会を目指し

て・・・」

「夏帆ちゃんは・・・強いね。私は、ダメだ・・・頑張ろう。私も、頑張るよ。夏帆ちゃん・・・一緒に、授業に出てみない？二人なら・・・きつと大丈夫。」

夏帆はちよつと考えて言った。

「・・・うん！いいよ。二人で、頑張ろう！！人生なんて今からでも変えられるよ！」

今日この日、人生で初めてこんなに前向きな気持ちにさせてくれる人と出逢えた。

く私よりつらい人く（後書き）

夏帆はすごいねえ（汗）

これから頑張つていきます、二人は！

登場人物もだんだん増えていくよ

応援よろしくお願いしますb

小6ですから想像が子供かもしれないが（汗）
次回もお楽しみにb

感想お待ちしております？

感想嬉しいです！w

〜家族の和解〜（前書き）

どもb

頑張ってコメディーにします？

暗かった女の子がどのように変わっていくのか!?

小6ながらの発想で頑張っていきますw

〈家族の和解〉

「明日から、授業にですよ。」
さつき、夏帆とそう約束した。

どんな目で見られてもいい。
2人が居れば、大丈夫だ。頑張ろう。頑張るしかない。

ー次の日ー

チユンチユン。何かの鳥の鳴き声がする。カーテンを開け、窓を開ける。

気持ち良い風が吹いてくる。思えば、窓を開けたのなんて何日ぶりだろう。

今日から、普通の高校生になる為に頑張るんだ。何でも人のせいにして諦めるのはもうやめよう。

リビングへ、降りていく。自分の部屋以外に行ったのはひさびさだ。母、父、姉、妹が食卓を囲んでいる。『え・・・』4人同時に声をそろえた。

びっくりした顔でこちらを見ている。普通の家だったら、朝起きてリビングに来ることは普通の事なのだが。

しかし普通って何だろう？まあそんなことを考えるのはよしとして・・・

「お母さん、私の分も、パン頂戴。」・・・母がびっくりしている。
「わ、わかったわ。」不自然なのだ。4人共。

私は、ずーっと部屋にこもっていたから、姉や妹にいじめられるのも、母や父に変な目で見られるのも覚悟してきたので、何とも思わなかった。しかし、そんな私の予想を遥かに超えた言葉を返された。

「未来、ゴメンね。私達、今までいじめて。家族だから一番わかってあげなきゃいけなかったのに・・・ゴメン。本当に、ゴメンね。」
姉と妹が、謝ってきた。素直に、それが嬉しかった。

「ううん・・・私もゴメン。素直に嫌だって言えば良かったのに部屋に閉じこもったりして。これからは姉妹で仲良くしようね。」
母と父が、泣いている。

「母さんと父さんも、ゴメン。変な育て方してゴメンね。親だから何でも言ってるね、これからは。いつでも未来の味方だよ。」
家族全員、泣きながら朝ご飯を食べた。こんなに楽しいのはいつぶりだろう。

お母さんが言った。「ほら、皆！泣いてたら、学校と仕事遅れるよ！来夢！小学校遅れるよ！今日は千夏ちゃんと学校行くんですよ！未来も！今日から授業行くんですよ？頑張りな^^ほら美月今日高校のテストじゃないの？お父さん！新聞なんか読んでないで！電車遅れるわよ！皆、頑張ってるね！」

少しだけ、頑張れる気がした。「行ってきましたー！」

「おねえちゃん、頑張ってるね！」来夢の声がした。「うん^^」
しかし、楽しかったのはこのときだけだったのだ。

〈家族の和解〉（後書き）

家族と和解できて良かったなあw

個人てきに来夢らいむが好きなんで（名前？）

他の小説でこの名前で全くの別人を出そうかな、とw

後、末っ子が好きなんですよw

あははw

この連載は、後もうちょいで終わるはずです！

後3〜6話のはず・・・w

次回もお楽しみに！

読んで下さった方、アドバイス、面白かった所、お教えいただくと
感激です！

コメント、感想超嬉しいです！

いつも読んでくださってありがとうございます^^
では、愛花でしたノ

〜本当の地獄〜（前書き）

お久しぶりで〜す

本日、短編書き始めたのでそちらもよろしくお願いします!!

笑いたい、アクセスどんどん増えてきてますぜ（ニヤリ）

みな様のおかげです!!

本当に感謝しております!

〈本当の地獄〉

夏帆との待ち合わせ場所へ、付く。

「夏帆ちゃん、おはよう。」久しぶりに、「おはよう」を言うのが、
なんだか嬉しかった。

「おはよう、行くところか。2人で頑張ろうね。」

「うん。」

「今日何か言い事あったでしょ!? 家族とより戻したとか?」

言って・・・いいのかな・・・大丈夫、友達だもん、信じよう。

「うん・・・実は・・・朝、家族に泣いて謝られて・・・」

「良かったね!! 本当に、良かった! きつと心配してるとおもうけど、私、全然怒ったり、悔しかったりしてないよ^^ 親友の嬉しい事だもん!!」

親友・・・人生で初めて言われた。幼いとき、その言葉にあこがれていた・・・

「うん。親友だよ!」

少し泣きそうになったけど、我慢して返事をした。

ふうー・・・よし、行くところ。二人そろって扉を開け、言う。

『おはよう。』

ざわざわっ。何あいつら。ずーっと来なかったよね。何なの? 何で来るの? 俺忘れてたw

こんなの、2人は想定済みだ。

すると、1人の女子生徒が来た。

確か・・・安童虹花だ。
あんどこうじか

天使のような名前だが、性格は正反対の悪魔、と噂だ。

「ねえ、アンタ達、ちょっとついてこいよ。ついてこなかったら、殺すぞ。」

な、ナニこいつ・・・

「おいてめえらシカトしてんじゃねえぞさつさとついてこいや」

女の子で、しかも虹花という名前なのに何この口調!?

取りあえず、二人はついていく事にした。

裏庭へ来る。

虹花が口を開く。

「おい、お前ら、殺しあいしろよwww」

『は!?!?』

「あー、意味わかってないのね、乙ww」

「何、アンタ、意味不明なんだけど。」と夏帆が言う。

「夏帆、お前さあ、未来の頭にバケツの水ぶっかけるよwww」

「は!?!?無理に決まってるでしょ。あたしたち親友よ」

「wwwうけるwwwてか親友とかおもてだけでしょwバケツの

水、こいつにかぶせたら、何もしないからさー夏帆ちゃんw」

「ぶざけんな、虹花が何しよう怖くない、はったりも何も怖くない。」

夏帆のこういう言葉を聞くと、安心する。

「何、夏帆、あたし、あなたの写真と電話番号、住所、メアド書いてあるやつホームページにだしてやるうか?え?」

「・・・ちよ!?!?やめてよ、それ犯罪よ!?!?」

「無理ならこいつに水かけろよ。」

虹花が、夏帆に無理やりバケツを持たせる。

夏帆は・・・目をつぶっている。

どうしよう、私はどうすればいいのだろう・・・

夏帆ちゃん、お願い、裏切らないで。でも私を裏切らないと夏帆ち

〜本当の地獄〜（後書き）

はい。

作者にも次の展開はわかりません。w

刹那。というのは私が好きな作家さんがよく使う言葉でもありますb
だから次の瞬間・・・にしようとおもったけど刹那。にしました。w

えー、次も読んでいただけたら光栄です 三

〜最高の嬉しさ〜（前書き）

ねえ、これ、どうなるの？

作者まだわかってないよ、大丈夫？W

夏帆は水、かけんの？かけないの？どうなるのだ（汗）

ではそちらは本編で！！GO〜

最高の嬉しさ

刹那。

バケツの水が・・・

未来は、「もうダメだ」と思った。水をかけられる覚語をした。しかし、夏帆は・・・なんと、なんと・・・

虹花に、水をかけたのだ。

「ちよっ、お前何すんだよ！！まじふざけんな！！」

夏帆が、笑う。「あんたの脅しなんか怖くないわ。私たち親友だもん、ね？」

最高に、嬉しい。本当に、嬉しすぎる。泣く。泣きそうになる・・・「まじでホムペに貼るからな！！！！」

「ええ、どうぞ。犯罪ですから。」

虹花は怒りながら逃げていった。「何なんだ、アイツら・・・」

私は、泣いている。

ああ、もう、何ていい子なんだろう、覚語をした自分にいらついた。親友だよ、って言うてくれた子を、水をかけるか、かけないか、心が揺らいでしまったのだ。

絶対、かけない。だって親友だもん。って信じてあげなきゃいけないかった。

夏帆はこんなにいい子だもん・・・かけるはずが、なかった。本当に、この子と出会えてよかった。この子のおかげで人生が変わった。

「夏帆ちゃん・・・ごめんね。私、かけられる覚語してた。」

泣きながら、私は言う。

「ごめん。ごめんね・・・信じないといけなかったのに・・・」

「いいよ。大丈夫、私は何があっても、これからもずっと未来を裏切ったりしないよ、大丈夫だよ。二人で頑張ろう?」

「うん・・・夏帆ちゃん・・・ありがとう。私たち、親友、だもんね^^」

「うん!!」

私たちは二人で、これからずっと頑張ることを、何があっても裏切らないことを、約束したのだ。

本当に、この二人なら頑張れる気がしたのだ。

授業にて始めて1週間後・・・

私に、好きな人ができてしまったのだ。

最高の嬉しさ（後書き）

えー、次回で完結にしようかなあ、と思ったけど好きな人ができる展開にしてくださいぶ先に延ばしました。W

えー、次回も読んで下さったらとても嬉しく思います？

まあ、後5話以内には完結だと思います^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5005z/>

笑いたい。

2011年12月31日20時48分発行